

オーストラリアへの旅

花尾省治

今や世をあげて原子力時代へと進んでいる。水爆実験、原子力発電、又南極探検とさわいでいるが、反面この地球の一部では未開の土人が住んでおり農業を知らず狩猟と魚をとっているといった太古さながらの原始的な生活を続けている。オーストラリアは世界で最も進んだ文明人と世界で最も未開な人種が一つ国に住んでいる。この人間的発展に余りにもへだたりのあるアボルジンという黒人がオーストラリアの原住民で大陸の奥地におり、その他の大部分が英国からの移住者のオーストラリア人である。

オーストラリアといえばカンガールが住み果てしない草原に羊の大群が緑草を喰んでいる夢の国としか考えていなかった。これが一般日本人の通念だろう。余り感心も持たず知られていない国オーストラリアへ、ジャージー護送の任務をおって旅立つことになったのが昨年の暮れで、未知の国へのあこがれというか、小学生の遠足へでもでてゆく前といった気持であった。オーストラリアの貨幣の種類、計算の仕方、携帯品、国情の違い等について特に婦人に対する礼儀等何かと課長、蔵地場長から細かい注意をうけ心の準備をし埠頭神戸を発ったのが2月1日であった。

我々一行は農林省関係4名、県関係3名で農林省は各種畜牧場種畜課長のメンバーでその道のベテラン揃いであった。乗船の夜は日本の土に最後の別れを惜み、我々が乗船する山下丸のキャプテン佐野俊範氏を中心にして盃をあげた。

オーストラリアへの行程はマニラ、タラカン（ボルネオ）を経てオーストラリアのシドニー、メルボルン、アデレード、ポートリンカーンに廻航し、それより再びシドニーにもどりここでジャージー牛を250頭積込みの上横浜直航というコースをとったのである。そのマイル数は神戸ーシドニー間（マニラ経由）6,233マイル。シドニー横浜間が4,365マイル、全行程実に12,965マイルといった長い船旅をしたことになる。

山下丸はアメリカ、印度等にもその足跡を残しており、全長137m船巾に較べて長さのある船で総トン数6,300t、時速13ノット、齢7年を経た山下汽船でまず優秀な部類の船である。「行きはよいよい帰りはつらい」と聞いていたが行きは全く仕事もなくのんびりとした船旅で全く申訳ない気持であった。毎日毎日が果てしない青海原で実に単調そのものの連続で、僧俊寛流刑の島喜界島が見えた時等は一同総出で船の眼鏡に飛びつく具合だった。食事は朝8時、昼12時、夕が5時だから食事の間が極めて短かく、日曜等で間食がでたりすると一層腹もへらず、ボーイの食事の知らせがあると又かと思われた。船が進むに従って（3ー4日目）急激に夏に早がわりし日本ではコタツにくるまっているのにシャツ1枚でよくなる。又夜明が次第とおくれて来て台湾台中の線では日本時間より約1時間違っていた。（船の時計をおくらせていく）かつて太平洋戦で日本輸送船団が次ぎ次ぎと沈められ死の海といわれたバーシー海を過ると東南アジア圏内に入る。

船は太平洋海戦の戦場の跡をたどって航跡を残して行く。アジアからオーストラリアへの道ー中生代の頃はアジアとオーストラリアは陸続きであったといわれている。インド支那半島とオーストラリアの間に無数の大小の島があたかも銀河の様に散在している。その数は1万ともいわれている。この帯を「エメラルド」の帯と称されている。その中心が赤道であり、これ等の島は常夏の国でもあり、強い日光の下に緑の島々が結ばれている。これを又「濠亜地中海」ともいっている。山下丸はこの東南アジアのフィリピン共和国とインドネシア共和国のボルネオ島にある小島タラカンに寄港した。